

横井小楠 — その業績と生涯 —



私塾「小楠堂」には、小楠の学風を慕ってさまざまな人たちが入門しました。小楠はこの塾で塾生たちにどのように接し、教えたのでしょうか。塾生たちとの人間関係はどうだったのでしょうか。



▲横井小楠と維新群像

ひそかに通塾した肥後藩士もいました。一方、他藩からの塾生も多く、特に目立つのは柳河藩と越前藩でした。柳河では、「肥後学」と言えば、小楠の「実学」を指したといい、小楠はのちに越前藩士との交流も行っています。

平成12年4月、熊本城が間近に見える高橋公園に「横井小楠と維新群像」が建てられました。小楠を中央にして5人が並ぶブロンズ像で、台座には小楠高弟6人が配置されています。

- ※聖人…知識や徳にすぐれ、世の模範と仰がれるような人。
- ※経伝…儒教の経典(中国古代の聖人の教えを述べた書物)とその解釈書。
- ※多士濟々…すぐれた人が多くいる様子。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。

7 小楠の指導と塾生たち

小楠の講義(授業)の特色は、聖人^{せいじん}の行いや教えを常に現在の状態と比べ合わせ、実際の場で活用することを基本にすえたものでした。そこで、経伝^{けいでん}だけでなく世の中の出来事に関して討論させ、その議題には、塾生が盆や正月に里帰りした時に見聞したもの(作物の出来具合や人々の生活ぶりなど)も取り入れていました。また、講義では特に大切なところでは、「繰り返し繰り返し、ご指導があり、理解できた」と言います。

小楠は、厳しい反面、たいそう親しみ深い所がありました。例えば、塾生たちとよく趣味の碁を打ちましたが、「待った待った」と手を取り合わんばかりに争うこともあり、また、剣術でも、まるで同僚のように互いに遠慮会釈なしに猛烈にたたき合うという調子でした。小楠の娘みやは「塾生の方々と父との親しみは普通の先生と弟子の関係ではなく、皆一家族のようで、塾生たちの家庭とも親しく交わっていました」と言っています。このように、小楠と塾生たちの絆はかたく、塾生は自分の信じる道を堂々と大手を振って進み、周囲の圧力が強ければ強いほど、一致協力し、師である小楠のために献身的に尽くしました。

小楠塾の塾生には優れた人物が多く、多士濟々^{たしせいせい}でしたが、実学党と学校党との対立の中で、父の許しを得られず、母の助けを借りて、